

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.134 April, 2017

目次

〈アジア太平洋研究センター (CAPS) 新所長挨拶〉

文学部教授 中江 桂子1

〈CAPS 主催企画の報告〉

シンポジウム

カストロフィと詩—吉増剛造の「仕事」から出発して
近畿大学文学部教授 八角 聡仁2

書評会 野口 淳・安倍 雅史 編『イスラームと文化財』
文学部准教授 佐々木 紳4

〈書評〉

孝忠 延夫／高見澤 磨／堀井 聡江 (編集代表)

『現代のイスラーム法』

法学部准教授 瀧 史彦5

〈CAPS 研究員 研究内容紹介〉

底辺労働の編成と世界的再編

—南米先住民・東北開拓山村・日系移民の視点から

CAPS 客員研究員 中田 英樹6

〈2017 年度 研究プロジェクト一覧〉7

〈アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告〉8

アジア太平洋研究センター (CAPS) 新所長挨拶

文学部教授 中江 桂子

私が研修期間をもらいウィーンで生活していた
ときのことです。ウィーンを中心部を移動するに
はトラム (路面電車) が便利で、私も毎日のように
乗っていましたが、旧式のトラムがまだ多く走っ
ていて、この旧式に乗るためには高い階段を3段
ほど登らなければならないのです。日本のように
交通機関がほぼバリアフリー化された都市から来
たばかりの私にとっては、重いトランクを抱えて
の移動は大変で、なんと不便なのかと感じたもの
でした。しかし生活してみると旅行者のトランク
だけではなく、お年寄り、足の不自由な方、ベビ
ーカーで荷物を持ったお母さんなど、地元のいろ
んな人がトラムを自在に使っています。どのよう
に高い階段を上り下りするのかといえば、そうい
う人がいると、周りの人々があたり前のように手
をかりて補助をするのです。最初のころ、あまり
に自然に周りの人が動くので、顔見知りか何かか
と思ったほどです。しかしそうではないのです。
ウィーンではトラムがバリアフリーではないため
に、たまたま居合わせた人々が互いに手を差し出
す光景が日常的に実現していました。日本では対
照的に、バリアフリーを実現できる経済的豊かさ
のおかげで、人々が互いに無関心・無関係でいら



れるという光景が妙に気になりました。

技術が高度化し便利になりバリアフリーである
ことはもちろん大事なことです。今では情報環境
はほぼ文化をバリアフリー化したといっても言い
過ぎではないでしょう。しかし、技術や情報のバ
リアフリー化にともなって、多様な文化やライフ
スタイルをもつ人々の心のバリアフリー化が進ん
でいるかといえば、実はそうでもありません。私
たちは、自分が親しんだ枠組みや環境が決して皆
にとって共有できるものではないことを知ってい
ます。そのうえ異邦人である自分や多様な他者と

向き合うことは、仲間と一緒に生きることと比べるとずっと居心地が悪いのも知っています。こうして、厳しい時代になればなるほど私たちは、心のバリアフリーとは逆の方向へ、知らないうちに、安心や安全という名のソフトな保守主義や内向き思考のなかへと入り込んでしまいがちになるのが、現在の悲しい趨勢でもあります。

ところが、あらゆる研究は、異質なものの、未知なるもの、不可思議なものへの好奇心からスタートします。もちろん、技術と情報のバリアフリー化は、部屋にいながらこの好奇心をある程度まで満たすことはできます。しかしそれは、実は幾重にもフィルターの掛かった内容であることは間違いないし、そこから発見やオリジナリティが生まれることは極めて困難です。研究が、つねに新しい発見と可能性を広げるものであり続けるためには、フィルターのかからない生の現実や人間たちに触れ、関係性を結びあい、都合のよいことも悪いことも含めて気づきを持つことがますます必要となります。人間が平和に自由に生きていく世界

に近づくために、世界の多様性を探求することや他者との関係性を構築することは、成果主義的ものさしではどんなに非効率なものに見えようとも、50年100年というスパンで考えるならば、効率的で不可欠な知的資源となるはずでです。私たちは冷静に、技術や情報のバリアフリー化の功罪をみきわめ、次世代の世界を想像しながら、未知なる多様性に向き合う努力を続けようではありませんか。異質な文化間の相互理解には、相当な時間と努力が必要であり、難事業であることも認めなければなりません。これを求め続ける研究者の姿勢は何より価値がありますし、またその研究姿勢を具体的に支援し、交流と発信の拠点でありたいというのが当センターの精神でもあります。

成蹊大学アジア太平洋研究センターは、各研究員や所員、職員の方々とともに議論しあいながら、発見と驚きと可能性に満ちた研究をはぐくむ環境をよりよく整える努力をしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

CAPS 主催企画の報告

～ 2016 年度の企画が無事にすべて終了しました。～

シンポジウム カタストロフィと詩—吉増剛造の「仕事」から出発して

近畿大学文芸学部教授 八角 聡仁

2017年3月11日に開催されたシンポジウム「カタストロフィと詩—吉増剛造の「仕事」から出発して」は、6年前のこの日の記憶を喚起することから始まった。鶴飼哲さん（一橋大学）が最初に紹介したように、高見順賞の授賞式が予定されていた当日、地震による新幹線の遅れで深夜になって到着した受賞者の金時鐘さんを東京駅で出迎えた一人が吉増剛造さんだった。一年後、震災に応答する詩集『眼の海』により受賞した辺見庸さんと合同の形で金時鐘さんの授賞式も行われ、その朝、マルセイユに滞在していた吉増さんは吉本隆明死去の報に接する。「大戦争の仔ゴーズー」とも自認する詩人は、災厄以後の言葉の「瓦礫化」のなかで、若き日の吉本が敗戦後まもない時期に書き継いだ『日時計篇』の「筆写」を始め、その手仕事の（破壊の）積み重ねは「ゴーズーシネ」の展開とも絡みながら4年あまりを経てひとまず詩集『怪物君』へと

結実することになった。

この一連のエピソードがすでに多様な問題系へとつながっていることは改めて指摘するまでもない。「反太陽の方位—吉増剛造初期詩文再読」と題して発表した鶴飼さんは、原爆投下の報を受けたアンドレ・ブルトンの「これは私たちが望んだ破局ではない」という言葉を引き、それでは詩人が望む破局とはどういうものかという問いを立てた上で、初期作品におけるカタストロフィにかかわるモチーフ群を取り上げ、「夜の詩人」ではなく「太陽との対決を選ぶ詩人」としての吉増剛造をめぐって詳細な読解を施すとともに、詩に現れる動物の形象について、福島第一原発事故による帰還困難区域の状況にも触れながら問題提起を行った。

「動物」をめぐる主題はジャック・デリダにも近接するものだが、郷原佳以さん（東京大学）の発表

は、デリダの「時差は私のうちにある。それは私だ。」、関口涼子さんの「声は時制をかき乱す」という二つの言葉をエピグラフにして始められ、『詩学講義 無限のエコー』における「教育者」としての吉増剛造にも言及しつつ、狭義の「詩」にとどまらないその「仕事」を、同伴する記録と記憶を（忘却も伴って）襲ねていく様相において、「多様性」や「豊穡性」とは異なる観点から捉え、フロイトの「マジックメモ」、映画用語のディゾルブなど多彩なレファレンスを用いながら論じた。郷原さんの話が長くあいだも、最前席に座った吉増さんがメモを取り録音し、身を乗り出して話に聞き入っている様子が視界に入る。こうして詩人は、記録／記憶の「無限のエコー」を自らのうちに響かせているのだ。

吉増さんの「講義」に学生として接した経験も持つ倉石信乃さん（明治大学）は、代表作の一つとして詩篇「石狩シート」を取り上げて、冒頭に現れる北海道の地名「望来」から写真家・大友真志の連作《望来》へと話を押し広げ、田本研造、掛川源一郎、露口啓二らの写真を紹介しながら、「開拓」というカタストロフィから現在に至る歴史の断層を指し示すことを通して吉増作品を照射した。続く柿木伸之さん（広島市立大学）の「言葉を枯らしてうたえ」と題した発表では、ベンヤミンの思考、また

パウル・ツェラン、原民喜の詩と吉増作品を呼応させながら、「言葉の手段化」に抗い、破局の残滓を宙づりにされた時間とともに見据える詩の言葉の可能性が探られた。『怪物君』というタイトルへの驚きを振り返った関口涼子さん（作家、翻訳家）は、それが「呼びかけ」（呼びかけてはいけないものへの）であるという見解とともに、時制を揺さぶる「詩のカタストロフィ性」について、「震災後文学」に関わった経験や、自身が震災を機に詩作から離れた経緯に触れながら語った。

CAPS所長（当時）の李静和さんからこの日の進行役を頼まれたときの、「ことばをはこぶ」という柔らかい一言が耳に残っている。言葉を運ぶことのできる人に集まってもらいたい…。いつも多くのモノを携えて「運んでいく」吉増さんの姿がそこに重なった。5人のパネリストの声を通して、吉増剛造の「仕事」から「出発」（それは詩人の第一詩集のタイトルでもある）した言葉はときに遠くまで運ばれ、互いに響きあい、結びつき、重なりあい、折りたたまれ…、そのスリリングな軌跡はともここで十分に辿り直すことはできない。予定していたディスカッションの時間はとれなかったが、最後に応答のコメントに立った吉増さんも含め、濃密で緊張度の高い交感の場が現出していた。李所長をはじめ関係者のご尽力に感謝したい。

（ゲスト）吉増 剛造 氏



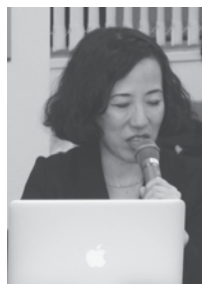
（司会）八角 聡仁 氏



鵜飼 哲 氏



柿木 伸之 氏



関口 涼子 氏



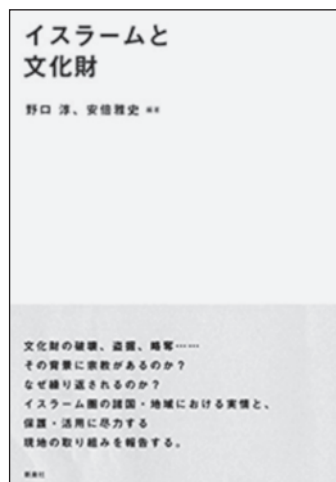
郷原 佳以 氏



倉石 信乃 氏

書評会 野口 淳・安倍 雅史 編『イスラームと文化財』

文学部准教授 佐々木 紳



2017年2月28日(火)、成蹊大学アジア太平洋研究センター(以下CAPSと略記)の主催の下、野口淳・安倍雅史編『イスラームと文化財』(新泉社、2015年)の編者・執筆者のうち4名をお招きして書評会を催した。

近年ますます混迷を深める中東地域を中心に、文化財の破壊と保護をめぐる現状を報告し、さまざまな角度から問題提起をおこなった本書をぜひ取り上げたいと思い立った次第である(なお、本書のささやかな紹介として、CAPS ニュースレター No. 131 を参照されたい)。司会の佐々木による主旨説明、李静和 CAPS 所長(当時)による挨拶の後、4名の登壇者と1名のコメンテーターによる報告に移った。

野口淳氏(NPO 法人南アジア文化遺産センター、東京大学総合研究博物館)の報告「なぜ私(たち)がイスラームと文化財の関係を考えるのか?」では、イスラーム地域における文化財・文化遺産の現況を概観した後、2011年以降のシリア内戦やIS(イスラーム国)の動向に接して「イスラーム諸国における文化財の実情を善悪正不正の判断にかかわらず伝える必要」から本書のアイデアが生まれたとの刊行経緯が披露された。その後、本書で積み残した課題として、事例の地域的偏り、無形文化財への目配り、文化財保護をめぐる近現代史の動向、文化財と現地コミュニティとのかかわりが挙げられ、発展的な展望が示された。

安倍雅史氏(東京文化財研究所)の報告「シリア内戦下における文化遺産の被災状況」では、2011年の内戦勃発以前に日本の調査隊が最も集中的に活動していた国の一つであるシリアを事例として、内戦下での戦闘にともなう遺跡・文化財の破壊、盗掘、略奪、不正輸出の実態について報告があった。文化財の保護に向けた現地の動きも大き

く取り上げられ、「シリア古物博物館総局」やアレppoの市民グループの取り組みなどが紹介された。最後に、今もシリア政府軍とISとのあいだで争奪の場となっているパルミラ遺跡の現況について、最新のスライド画像を交えながら報告があった。

魚津知克氏(大手前大学史学研究所)の報告『『イスラームと文化財』再考——遺産化、再遺産化、脱遺産化におけるコミュニティ、国家、宗教:東南アジア・ミャンマーから』は、同書の執筆担当部分であるミャンマーの事例を概観した後、本書全体にかかわる今後の課題として、さまざまな事例を横断したモデル化ないし概念化の必要性を指摘した。その上で、一つの試みとして、遺跡や遺物などの対象が一般市民や専門家によって考古学資料として認知され(「資料化」)、それが政治的・組織的決断を経て文化遺産として認定される(「遺産化」)プロセスに注目したフローチャートを提示し、海外の研究コミュニティとの相互交流の方途を確保しながら、日本発の文化遺産学研究が必要であるとの提言をおこなった。

田中英資氏(福岡女学院大学)の報告「関係性のポリティクスとしての文化遺産——トルコの事例から考える」は、先史時代から現代にいたるまで国内に数々の「異文化遺産」を抱えるトルコを事例として、文化遺産をめぐる問題を、過去の遺物を自分たちとどのように関連づけるか(あるいは関連づけないか)という「関係性のポリティクス」の問題と捉える視点を打ち出した。その上で、そもそも「文化遺産」とは何かという問いかけの下、「保護」と「破壊」の線引き、文化遺産をめぐる利害集団の動き、さらには「負の遺産」の扱い(抹消すべきか、保護すべきか)といった発展的な論点を提示した。



以上4本の報告に対して、コメンテーターの有富純也氏（成蹊大学）は、古代から近代までの日本史における文化財破壊の事例を提示することで問題を捉える視点を相対化した後、中東地域と日本の文化財をめぐる歴史や現況を比較の視点から分析して類似点を指摘し、コメントとして文化財の破壊を防ぐ手立ては何か、という本質的な問いを發した。登壇者のリプライでは、何よりもまず文化財保護というテーマが一つの研究分野として認知されるようになること、そのための共通理解を構築すべくモデル化が必要であること、しかしそれには実証的な事例研究の積み上げが不可欠であること、その実践の場として本書の「第二弾」を企画したい、といった方向で議論が広がった。終盤には来場者からも発言を募り、法学、観光学、文化政策学等の観点から専門的な質疑やコメントが寄せられた。拙い進行ゆえに終了予定時刻を大幅に超過してしまったが、当該テーマをめぐる議論

が学際的研究として大きく展開する可能性を秘めていることを実感できた書評会であった。



野口 淳氏



安倍 雅史氏



魚津 知克氏



田中 英資氏



有富 純也氏

佐々木 紳
(司会)

書 評

孝忠 延夫／高見澤 磨／堀井 聡江(編集代表)

『現代のイスラーム法』(成文堂、2016年)

法学部准教授 瀧 史彦



本書はアジア法学会の創立10周年を記念した大会における報告をもとに編まれた書物であるが、単なる論文集ではない。巻末には『イスラーム法通史』(山川出版社、2004年)の著者でもある堀井聡江の手になる信頼度の高い用語解説が付されており、イスラーム法の入門書としても役に立つ。

イスラーム法(シャリーア)について評者はこれまで「数百年前に確立した法原則が宗教的権威に守られて連綿と維持され、変革を拒んでいる」「イスラームの教義から演繹された規範が硬直的に適用され、それが現実社会で合理的な結果をもたらすかどうかは必ずしも重視されない」といった先入観を抱いていた。しかし、本書の叙述を通して

見えてくるイスラーム法の実像は違っていた。イスラーム法においては西洋法と同等かそれ以上に、解釈を通じた法の発展ないし創造が活発である。最上位の法源であるクルアーン(コーラン)についてさえ、テキストの権威性とは裏腹に多様な解釈の併存が許容されている。たとえば、イスラーム金融機関で金融スキームの審査にあたるシャリーア諮問委員会はファトワー(鑑定意見)を発するに際し、スンナ派の正統4学派はもとより、時には12～13世紀に消滅したザーヒル派の典拠まで含めた複数の解釈を参照するという。宗教的権威が自由な解釈を妨げ、法の発展を阻害している、といったイメージは実態に即していない。家族法(本書第2章)の領域でも、立法による改革の試みとは別に、裁判所の法解釈を通じた離婚法の変容が続いているという。

イスラーム金融(本書第4章)の分野では、イスラーム取引法の利息禁止原則を回避する各種の金融スキームが開発されてきたが、利息禁止原則をめぐる議論状況も法解釈のダイナミズムを示している。そもそもクルアーンに記されているのは「リバー」(不等価交換)の禁止であり、そこから「利息

の禁止」原則を導くこと自体が「利息は常にリバーにあたる」との解釈論（「利息＝リバー・コンセンサス」）を前提としたものである。他方で、利息の禁止を回避する金融手法として1970年代からムダーラバ（匿名組合）のスキームが盛んに用いられるようになったが、ムダーラバがシャリーアの理念に完全に合致した望ましい金融手法であるとする考え方（「ムダーラバ・コンセンサス」）も一つの解釈論にはかならず、絶対的なものではない。実際、これらの伝統的立場に対抗して、近年では「利息＝リバー・コンセンサス」や「ムダーラバ・コンセンサス」そのものを疑い、預言者ムハンマド時代の理念を規準としてイスラーム金融の新たな方向性を提示する学説が登場しているという。

シャリーアの理念に準拠しながらも結論の合理性・妥当性に配慮した、現実感覚に基づくルール運用の例として、マレーシアのハラール認証制度（本書第3章）が興味深い。そこでは、食品や化粧品がハラール（合法）であることを保証するために、商品自体だけでなく、レストラン・倉庫業者・運送業者などについても詳細なハラール認証基準が定められている。そして、基準に適合するか否かを判定する際には、シャリーア法源の解釈と

もに人体への有害性についての科学的知見が参照され、さらに判定結果が現実の生活に及ぼす影響も実質的に考慮されている。たとえば、カイガラムシの体液から作られる着色料について「食品の重量の0.03%ないし0.06%の範囲で」使用を認めるという（標準的な用法を追認する内容の）ファトワーが出されたし、アルコールを含む伝統的な発酵食品やジャコウネコの糞から採集される高級コーヒー豆も、認証を取得できる。

イスラーム法の現代的トピックの多くは、1970年代以降、ムスリムの宗教的アイデンティティの高まりを原動力として生じたものである。イスラーム金融は1970年代から急速に発達したのであり、それ以前はイスラーム世界でも西洋型の金融取引が主流であった。マレーシアでハラール認証制度が始まったのは1974年である。エジプトでは大学の制定したニカーブ（顔覆い）禁止規定をめぐる憲法訴訟（本書第1章）が1987年に提起されたが、都市部の高学歴層を中心にニカーブを着用する女性が増えてきたのは1970年代以降であった。逆説的であるが、イスラーム世界では「イスラーム法（シャリーア）の理念」というキーワード自体がすぐれて「現代的」なのだといえよう。

CAPS 研究員 研究内容紹介

底辺労働の編成と世界的再編—南米先住民・東北開拓山村・日系移民の視点から CAPS 客員研究員 中田 英樹

第一の研究の柱としては、私は大学院時代から、グアテマラでの「トゥモロコシの文化」を維持してきたマヤ系先住民が、近代化を進める国家に被抑圧者として統合されていく近現代史および、「多文化主義」を掲げる現代グアテマラ社会において、先住民たちがどのように生業を変遷させているのかに関する研究を続けてきた。

グアテマラにおいて1996年の内戦終結までは、トゥモロコシに根ざした伝統的なマヤ文化とは、近代的発展を目指す国家から、教化や同化の対象とされてきた。その担い手たる先住民たちは、歴史的にマイノリティの位置に従属させられ、内戦下では虐殺の対象とされた。

だが今日、政府は「多文化共生」を掲げ、逆にこのマヤ文化を観光産業の「目玉商品」として動員し

ている。私は、この時代転換を踏まえ、国内では唯一といえるコーヒー栽培を先住民自らが村内に導入し、トゥモロコシ栽培を捨てた先住民村落S村を事例とし、コーヒーによる経済水準の安定化過程と村落構造の諸変化について研究をしてきた。そして現在の当村では、「自然と共生した伝統的な農法で、抑圧されてきた貧乏な先住民の作るコーヒー」といった表現で、日本にもフェアトレードなどを介して輸入されている。こうした現代的な動向に関しての実証的な研究に従事してきた。

現在では、多文化主義を掲げる現代グアテマラ社会にて、先住民（女性）がどのように、家政婦や民族工芸品生産労働者といった底辺労働者として、国家経済に再統合されつつあるのか。あるいは、それによって、出自の山間部の伝統的な先住

民村落共同体に、どのような影響が及んでいるのか、という点がこの研究テーマの背景である。リーマンショック以降、山間部に暮らす多くの先住民世帯は一層経済的困難に陥り、都市部へと単純労働者として弾き出されている。これまで、自らの家族のために行ってきた家事労働を、家政婦としてサービス商品化するようになった。こうした新たななかたちでの先住民女性の、グアテマラ経済の底辺層への包摂の過程を、ミクロに考察してみたい。

また同時に、第二の研究の柱として、日本国内を対象にした研究として、岩手県北における戦後開拓山村を対象に、戦後の大規模化農政のもと、どのようにこれら地域が大規模酪農地帯として再編されるかについて、自給のための雑穀栽培の変遷や、食卓の変遷から考えてきた。

とりわけ東日本大震災による原発事故を受けて、私は共同研究を組織し議論しはじめたが、そこでもやはり東北のとりわけ戦後における開発史と住民の動きを歴史的に捉えることが重要だという見解に至った。この関心のもと、岩手県のとり

わけ戦後開拓山村に着目し、米作はもとより雑穀栽培すらままならないこれら諸地域が、戦後の大規模化農政のもとで、一大酪農産地として、或いは「リクルート事件」に象徴されるように一大リゾート開発地として、戦後の国家発展へ向けて再統合されていく過程において、これら地域の開拓民たちがどのように主食を確保してきたのかという視点から考えたいと思っていた。そこで私は、岩手県北の戦後開拓山村、奥中山開拓地を事例として取りあげ、戦後日本の周縁社会であった東北山間部と、南米内陸部の原生林に潜む日系社会を、両地を行き来した貧困層の日系移民を手がかりに繋げたモノグラフを纏めようとしている。

こうした日系移民は、しばしば南米への「棄民」とされる。だがこの移民たちは、ブラジルやパラグアイで大豆生産を大規模化し、日本へと大豆を供給する地として、あるいは1990年代以降は移民自身が「デカセギ」の労働者として、不可欠な周縁的役割を担ってきた。世界的な視点からみたときの、ラテンアメリカの日系人社会が戦後の日本経済において果たした役割を考えたい。

〈2017年度 研究プロジェクト一覧〉

		責任者名	研究題目と目的
共同研究プロジェクト	三年目	森 雄一 文学部教授 (継続)	認知言語学の新領域開拓研究 (期間：2015.4.1～2018.3.31) 題目：認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として— 目的：英語・日本語・アジア諸語を中心に、従来は記述的・伝統的手法によって扱われてきた言語事実や隣接領域の進展により開拓されてきた言語事実を認知言語学的手法によって解明する。
		細谷 広美 文学部教授 (継続)	グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ (期間：2015.4.1～2018.3.31) 題目：グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ：グローバルとローカルの出会う現場から 目的：グローバル・ジャスティスに焦点をあて、グローバル化が進展するなかでのグローバル・ジャスティスの模索と、ローカルレベル及び特定集団の多様なジャスティスとの関係、ネゴシエーションのプロセス、ジャスティスが汎用化されるプロセスについて、それらが起こっている現場から検討していく。
	二年目	日比野 啓 文学部教授 (継続)	アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響 (期間：2016.4.1～2019.3.31) 題目：アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響 目的：アジア太平洋地域において西洋音楽がどのように人々の感受性に影響を与えてきたか、情動(affect)理論の最新の知見に基づき再検討をはかる。
	一年目	渡邊 大輔 文学部准教授	グローバルエイジングとライフコース変容 (期間：2017.4.1～2020.3.31) 題目：グローバルエイジングとライフコース変容：福祉国家形成と展開の社会学的分析 目的：高齢化が進展する中で、福祉国家形成が進む先進諸国と途上国間で、どのようなライフコースの変容がみられるか分析する。
		佐々木 紳 文学部准教授	アポリアとしての文化財保護 (期間：2017.4.1～2020.3.31) 題目：アポリアとしての文化財保護—学際的アプローチから考える 目的：アジア、アフリカ、欧米地域における文化財保護の歴史と現状に注目し、文化財保護の意味と意義、およびその困難さを学際的、多角的に再検討することをめざす。

パイロット研究プロジェクト	上田 泰 経済学部教授	組織市民行動の受け手の心理と誘発される行動について (期間：2017.4.1～2018.3.31) 題目：組織市民行動の受け手の心理と誘発される行動について 目的：同僚による組織市民行動を目撃した、あるいはそれから恩恵を受けたことを認識した組織成員の心理と行動を解明することを目的とする。
	村上 朝之 理工学部教授	水資源の高度利用に資する気液境界放電シミュレーション (期間：2017.4.1～2018.3.31) 題目：水資源の高度利用に資する気液境界放電シミュレーション 目的：空気と水の境界領域においては、放電現象、すなわちプラズマ・レーザーなどによりエネルギーを与えることで、豊富な活性種を生成することができる。水環境保全・農業など多くの分野で、この化学的に活性度の高い液体が利用されつつある。本研究では、数値計算シミュレーションにより空気-水境界における複雑な化学的反応ネットワークを解明することを目的とする。
	内藤 準 文学部 専任講師	主観的自由と社会経済的資源の関連に関する研究 (期間：2017.4.1～2018.3.31) 題目：主観的自由と社会経済的資源の関連に関する研究：国際比較による分析の試み 目的：行為者の「自由」の性質および資源分配との関連について、計量的な分析によって明らかにするとともに、国際比較データを用いて社会文化的な違いを検討する。

アジア太平洋研究センター(CAPS)活動報告(2016.12.16～2017.3.15)

公開講演会、研究会、研究出張などの記録

- ◇12月17日(土)センタープロジェクト国内出張(17日まで)
出張者：三田 奈穂(法学部助教)
調査地：京都府
目的：法制史学会近畿部会へ参加のため
- ◇1月28日(土)センタープロジェクト研究会
「アジア太平洋地域における情動メディアとしての西洋音楽の影響」
講演者：ヘンリー・ジョンソン、バーナビー・ラルフ
参加者：10名
- ◇1月29日(日)センタープロジェクト研究会
「グローバル・ジャスティスの模索とローカリティ」
講演者：石田 慎一郎、上杉 妙子
参加者：10名
- ◇2月24日(金)センタープロジェクト海外出張(3月1日まで)
出張者：バーナビー・ラルフ(文学部准教授)
調査地：ドバイ酋長国
目的：国際会議出席のため
- ◇2月28日(火)センター主催書評会
「イスラームと文化財」
ゲスト：野口 淳、安倍 雅史、魚津 知克、田中 英資
参加者：22名
- ◇3月2日(木)センタープロジェクト海外出張(9日まで)
出張者：日比野 啓(文学部教授)
調査地：アメリカ合衆国
目的：ニューヨーク市立図書館パフォーミングアーツ分館において資料収集のため(ハロルド・ローム・コレクション)
- ◇3月2日(木)センタープロジェクト国内出張(5日まで)
出張者：三田 奈穂(法学部助教)
調査地：長野県・大分県
目的：松本市立図書館・咸宜園教育研究センターにて資料収集のため
- ◇3月3日(金)センタープロジェクト国内出張(3日まで)
出張者：長谷川 明香(センター特別研究員)

調査地：愛知県

目的：第46回応用言語学講座公開講演会出席のため

- ◇3月5日(日)センタープロジェクト国内出張(5日まで)

出張者：森 雄一(文学部教授)

調査地：京都府

目的：動的語用論研究会出席のため

- ◇3月11日(土)センター主催

「カタストロフィと詩—吉増剛造の「仕事」から出発して」

ゲスト：八角 聡仁、鶴飼 哲、柿木 伸之、倉石 信乃

郷原 佳以、関口 涼子

参加者：102名

- ◇3月15日(水)センタープロジェクト国内出張(16日まで)

出張者：森 雄一(文学部教授)

調査地：大阪府

目的：日本語用論学会メタファー研究会出席のため

- ◇3月15日(水)センタープロジェクト研究会

「認知言語学の新領域開拓研究—英語・日本語・アジア諸語を中心として」

講演者：李 菲、小嶋 美由紀、相原 まり子、三宅 登之

参加者：10名

運営委員会・所員会議開催の記録

1月17日(火) 第5回所員会議

1月26日(木) 第5回運営委員会

2月14日(火) 臨時所員会議

2月17日(金) 臨時運営委員会

CAPS Newsletter No.134

2017年4月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター

〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>